

# 民俗博物館だより

Vol. X No. 3

1983. 11. 25



▲山の神まつり (上北山村西原)

## 目 次

視聴覚と展示(地域博物館を考える⑭).....	1
六斎念仏用具について(物質文化⑪).....	3
正月・元旦の行事(大和の年中行事③③).....	5
副業としてのフゴ作りについて(フィールドノート).....	7
マエビキとその職人(フィールドノート).....	9
行者講(民俗資料調査抄報②②).....	11
お知らせ・他.....	11

## 視聴覚と展示

喜谷美宣

博物館における視聴覚的資料、とくに映像の活用は、いまや不可決の事柄になっています。

ことに、国立民族学博物館における「ビデオテーク」の成功は、そうした傾向を一層強めたように思われます。

国立民族学博物館のように独自の装置を新たに開発し、300種類もの映像のなかから観客が自由に番組を選びだせるような施設は、地方博物館ではとうていセットできません。しかし各博物館では、テープやスライドを活用しながら、映像展示に大いに取りくみつつある。というのが現状であります。

\* \*

博物館において映像を利用する方式はいくつか考えられます。

ひとつは展示場で、他の展示物と同じ位置で映像を視ることができるようビデオやスライドをセットする方法です。

この場合は、まず第一に音響をどう処理するか、という点が問題になります。映像をみていない観客への影響が心配なわけです。また、映像をみる観客が動きを停止することによって動線にどう影響するか、という点も気がかりです。さらに、動きのある映像が、静止している展示資料よりも観客に強くアピールして、主客転倒してしまうおそれもあるわけです。

そこで、もう一つの方式として、映像を実物展示の場ときりはなして、独立した場所をつくり出すという方法が採用され、国立民族学博物館などで成功しているように思われます。

○ ○

神戸市立博物館では、展示室の大きさや動線の関係から、後者の方式を採用し、ビデオディスクとVTRを使って展示室とは別のところで実物展示が困難なものを重点的に映像化しています。

たとえば、「空からみたわが街・神戸」というような都市景観を空からとらえた番組、「箱木家住宅」・明治の西洋建築、「五色塚古墳と小壺古墳」のように動かせない遺跡・遺構

を映像で紹介する番組、「神戸人形」・有馬人形筆、のように特産品の製作工程を紹介する番組、「長田神社古式追儺式」・淡河八幡神社御弓神事、のように、動きのある祭礼の様子を紹介する番組、さらには、昭和初期の16mm映画に映された風景と現在の風景とを対比させた「神戸・街角の今昔」といったように、さまざまな角度から実物展示を補うような番組を製作しています。

番組の長さは1本が約7分です。観客がそこにとどまる時間を5～7分とみているわけです。それを越えると観客が席を立つてしまうことが多くなるからです。

今後も、番組をできるだけ増やしてゆきたいという希望をもっていますが、館の自主製作は経費的になかなかゆるされません。1年間にせいぜい数本ですが、今後もできるだけ自主番組の製作に取りくみたいと考えています。

○ ○

神戸市立博物館では、映像を利用したもう一つのコーナーとして「考える、コーナー」を設けています。

ここでは神戸の話題や歴史の問題をモニターテレビで放映し、各席に備えつけられたヘッドホンで問題を聞きながら押ボタンで解答をする。そして即座に正誤がわかる、というわけです。1問題が約2分、5問で10分程度でクイズを楽しむことができるわけです。今後は、半年か1年毎に問題を変えながら続けてゆきたいと考えています。

○ ○

神戸市立博物館にはもう一つ「触る、コーナー」というのがあります。

ここでは、縄文土器、弥生土器、須恵器、埴輪などを直接さわって、銅鐸の音色を聞けるようにしています。

とはいえ、土器や埴輪の本物をケースからとり出して直接さわっていただくというわけにはゆきませんので、土器や埴輪のレプリカを、材質の同じもので製作して利用しているわけです。縄文土器や弥生土器は、大昔の人

人と同じように手づくりで、野焼きで仕上げましたので、本物そっくりの手触りを体験していただけますし、須恵器も古い窯と同じような窯を築いて焼き上げましたので、色合いも感触も本物そっくりにできています。

また、銅鐸も合金の割合も形も本物と同じように製作しましたので、弥生時代の音色を楽しんでいただけるというわけです。

このようなコーナーを、視聴覚コーナーに入れることは厳密な意味では問題があるかもしれませんが、今後はこうした観客が直接ものにふれるコーナーというのも増やしてゆか



▲講演会(講堂)

ねばならない部門だということができるでしょう。

以上が、現在神戸市立博物館が実施している視聴覚展示の状況ですが、展示と関係深いものとして講堂に16mm映写機とスライドの映写機をセットしています。これらの器機は講演会等で活発に利用していますが、映画の自主製作までにはまだいたっていません。

\*

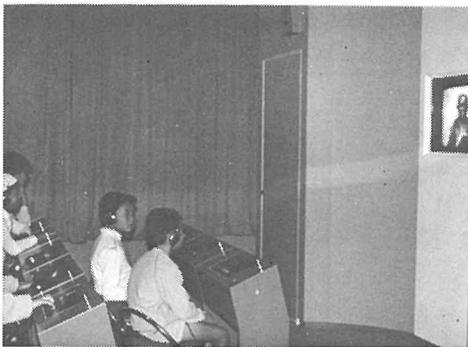
\*

最後に、視聴覚関連の行事をもう一つ紹介しておきましょう。

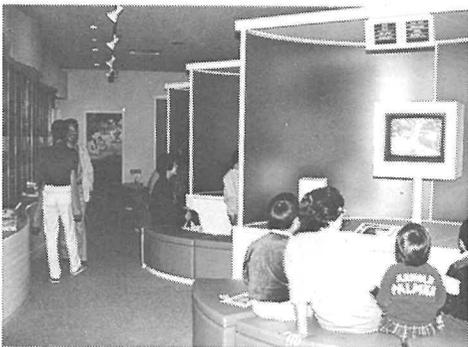
それは、ミュージアム・コンサートです。

一階ホールの二階まで吹き抜けの空間を利用して行っています。音響効果の関係でオーケストラというわけにはゆきませんが、小規模な合奏や独奏で音楽ファンを楽しませています。展示とは直接関連しませんが、博物館の落ち着いた雰囲気を利用し、新たな博物館ファンの開拓に大きな効果をあげているように思われます。

(神戸市立博物館学芸課長)



▲あなたは何問答えられますか、(学習室)



▲さて、どの番組を選ぼうか、(同上)



▲弥生時代の音色を聴いて下さい、(同上)



## 六齋念仏用具について

奥野義雄

— 館藏品と西迎寺管理の六齋念仏太鼓を中心に —

館藏品中で稀少かつ貴重な資料として挙げることができる六齋念仏用具とくに念仏太鼓についての紹介と、この用具から展開し得る大和とくに奈良市域の六齋念仏太鼓職人の存在について触れていくことにしよう。

\* \*

まず、館藏品である六齋念仏太鼓について窺っていくことにする。この念仏太鼓は、奈良市佐紀町の六齋念仏講（地元では単にネンブツコウと呼んでいた）が所持していたものであるが、昭和55年12月に地元の当時区長であった村田善一氏の尽力と講中の方々の好意によって寄贈されたという経緯をもつものである。そして、往時この太鼓と共に六丁の念仏鉦も地元の光明寺に保管されていたが、その内念仏鉦二丁を含めた寄贈を受けることができた。この佐紀の六齋念仏用具は、後述する秋篠町の六齋念仏（西迎寺）や、法華寺町の六齋念仏（極楽寺）と同様に、太鼓念仏と鉦念仏で唱名していたことを例証するものであり、大和の六齋念仏を検討していく途で貴重な資料である。収集当時寄贈いただいた念仏鉦の裏面外周縁に陰刻されていた銘文の一例を挙げると、

爲玄蕭童子井 天明二<sup>(平)</sup>壬<sup>(年)</sup>寅 天七月  
常福寺村彌右衛門寄進之者也

と記されていて（資料番号K1281）、江戸時代後半にはすでに佐紀のムラの六齋念仏が存在し、かつ活躍していたことを知る。このことはともかく、次に佐紀町の六齋念仏太鼓の特色、法量などを記載することにしよう。

\* \*

六齋念仏太鼓・採集地 奈良市佐紀町

(1)資料番号K1283 ①法量φ 31.6cm W32.3cm  
ⓐ重さ2,230g ②様式胴部木製・両端皮張  
③色張茶色(木部)および暗灰色(皮部) ④  
欠損部分張皮円周部破損

この太鼓の胴部内側面には、次のような墨書銘がある。この墨書銘の検出は、同資料の張皮部分の破損によるものである。銘文は4列に「奈良市」「太鼓商」「細工人」「中井弥四郎」とある。

(2)資料番号K1284 ①法量φ 30.2cm W32.2cm

ⓐ重さ2,420g ②様式胴部木製・両端皮張  
③色調茶色(木部)および暗灰色(皮部) ④  
欠損部分張皮円周部破損

この太鼓も(1)と同様、張皮破損によって胴部内面に墨書銘があることを確認し得たのであるが、銘文は(1)と同文で4列に亘ることが窺えた。

(3)資料番号K1285 ①法量φ 30.3cm W31.6cm  
ⓐ重さ1,285g ②様式胴部木製・両端皮張  
③色調茶色(木部)および暗灰色(皮部) ④  
欠損部分なし

この太鼓の張皮部分には欠損部分がないため、銘文の有無確認は不可能であるが、おそらく(1)(2)と同様な銘文があると考えられる。

(4)資料番号K1286 ①法量φ 32.5cm W31.6cm  
ⓐ重さ2,490g ②様式胴部木製・両端皮張  
③色調茶色(木製)および暗灰色(皮部) ④  
欠損部分張皮円周部破損

この太鼓も(1)(2)と同様、張皮破損によって次の墨書銘が確認し得た。すなわち、

奈良市畑中  
太鼓商  
細工人  
中井弥四郎

という銘文で、(1)(2)と若干異なり、「奈良市畑中」とある。この銘文によって、太鼓商中井弥四郎という人物の所在が明らかになったといえる(傍点一奥野)。

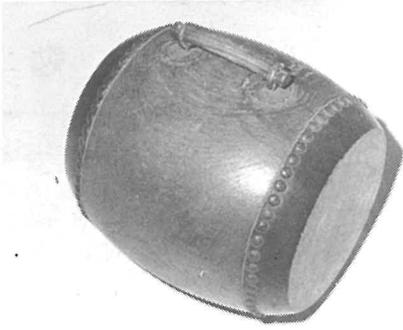
(5)資料番号K1287 ①法量φ 30.6cm W32.1cm  
ⓐ重さ2,460g ②様式胴部木製・両端皮張  
③色調茶色(木部)および暗灰色(皮部) ④  
欠損部分なし

この太鼓の胴部内面には、墨書銘があると考えられるが、張皮の欠損がないため、銘文の有無の確認は不可能である。

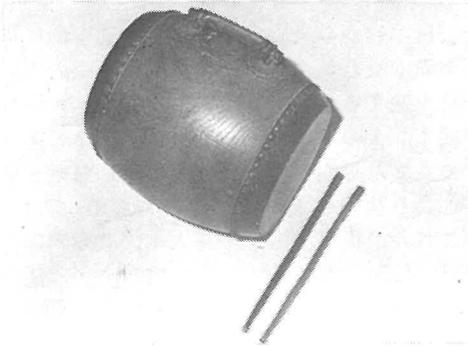
(6)資料番号K1288 ①法量φ 32.1cm W30.9cm  
ⓐ重さ2,315g ②様式胴部木製・両端皮張  
③色調茶色(木部)および暗灰色(皮部) ④  
欠損部分なし

この太鼓も(3)(5)と同様に墨書銘の有無を確認することができない。

以上、念仏太鼓6点の法量、色調、様式な



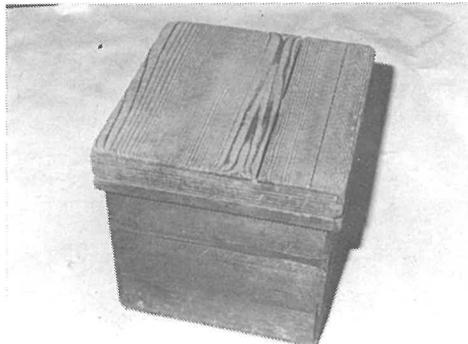
▲念仏太鼓



▲念仏太鼓



▲念仏太鼓



▲念仏太鼓箱

どを窺ってきたが、ここで興味深いことは胴部内面の墨書銘である。この胴部内面に墨書された銘文から太鼓の細工人が「奈良市畑中」在住の「中井弥四郎」であり、「奈良市」と記載することから、この太鼓の製作年代の上限を奈良市制以後すなわち明治31年以降と設定し得るのである。(この点については後述の銘文で明らかである)。

さらに、この太鼓の胴部内面の墨書から、これと同様な念仏太鼓を所持保管している奈良市秋篠町の西迎寺の念仏太鼓の胴部内面に墨書されていた銘文が想起されてくる。この秋篠の六斎念仏太鼓とその墨書銘について次に触れて、佐紀の六斎念仏太鼓および墨書銘と関連させながら、若干素描していくことにしたい。

\* \* \*

奈良市秋篠町の六斎念仏講はすでに絶えて久しいが、この講中の所持していた用具には念仏鉦と念仏太鼓があり、同地にある西迎寺が管理している(奥野義雄「大和の念仏講」『まつり』第39号所収、同書参照)。この念仏講用具としての念仏太鼓が、同時に6点保存されていて、完形品がほとんどなく張皮が破損し、胴内部に墨書されていることがわかるのである。この念仏太鼓の一点に、

明治三十五年 中井弥四郎

という銘文がある。この「中井弥四郎」という人物が、前述した館蔵品の念仏太鼓にみた墨書銘すなわち「太鼓商 細工人 中井弥四郎」と同一人物であることは大過ないところである。このことは太鼓商細工人である中井弥四郎の交易範囲を示唆するとともに、秋篠の念仏太鼓の一つが明治年間に調整されたものであることが窺える。

このように念仏太鼓のもつ宗教的要素とは異なり、ここではこの要素に附随した物質的要素の一端を試みに提示したにすぎない。さらに、この「物」としての念仏太鼓の交易圏だけでなく、技術およびその集団についての視点やこれらを含めた歴史的視座も今後の課題として横たわっている。これらの点を提示しかつ念仏鉦については後日検討することとして結びとしたい(小稿では太鼓の撞木については略したことをことわっておく)。

(1983. 11. 11. 3)

## 正月・元旦の行事

浦西 勉

かつて、奈良県下の農村において、どのように正月行事がいとなまれていたのでしょうか。この「民俗博物館だより」の大和の年中行事シリーズでは第1回目に「正月迎え」が記され、若干ではあるが正月行事を紹介しているが、その後あまり触れられていないので今日、元旦を中心とした正月行事について記すことにしよう。

\*

\*

コトハジメと言うことばが関西にあって、12月13日に、多くは芸人が師匠の家にあいさつにゆく風習を言うのである。これは、正月の祝い、あるいは正月の準備始めと解されているようである。この頃から正月を意識し、正月の準備が始められるのである。奈良県下においても、コトハジメの日から正月の準備をすところもあるが、ところによってはまだこのころ農作業、特にウスヒキにあわただしいところもあったようである。10月稲刈り、脱穀、11月には麦の種まきをすませ12月になってウスヒキをすところが多かった。このためか、奈良盆地北部では春日のオンマツリまで(12月17日)、南部は長谷寺の仏名会まで(旧暦12月8日・新1月8日)にウスヒキを終えねばならぬとされていた。このことはこのオンマツリ、仏名会から正月の準備が始められると言うことになる。実際、このオンマツリや仏名会には正月用の市が立ち、近郷近在の人々が集り正月に必要なものを買ったのである。このように奈良県下では正月準備は、つまり正月を意識し始めるのは12月の中旬以降ということになろう。

さて、正月準備とは、その主要な仕事とし



▲フクマルをつくる(室生村深野)

て、正月の神を迎えるための家の内外の掃除である。吉野郡ではイロリの火かえなどもこれに当る。また、餅つきや正月に食べる物の準備や買い物などがある。そして次に、門松やシメナワの準備などがあげられる。奈良県下では12月中旬から①掃除 ②買い物 ③餅つき ④正月の飾り などの順で正月準備が行われる。

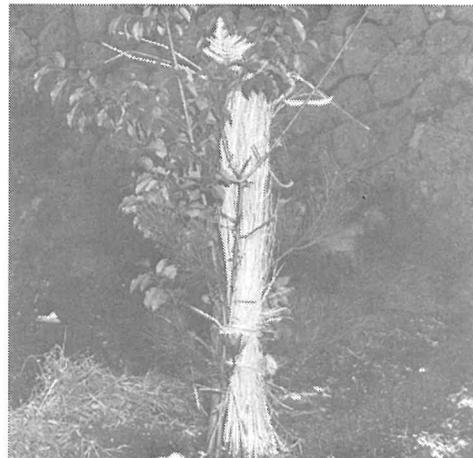
\*

\*

12月中旬から大晦日にかけて加速度的に正月準備が行われ、特に28日以降、家の人々は正月を迎えるための準備であわただしい毎日が続く。大晦日には、門松、シメナワの飾り物や、また村内の道や氏神の参道に白砂をまくところなどもある(奈良市、天理市)。

これら、正月準備をする人々の心の内は、正月には何かがやってくると信じているようでもある。このことが良くわかるのは東山中のフクマル迎えという風習によってであろう。このフクマル迎えは、大晦日各家々や、村の中において火を焚く行事であり、その火の明りによって正月の神を迎え込むとされている。

たとえば、室生村深野において、夕刻に座敷の障子を全部あけはなし、その見えるところにフクラソの木に藁一束を掛け、それを焚くのである。その時「フクマルコッコォー」と大声で呼びたて、フクマルが座敷へ入ったと判断した時障子をしめるといふ風習が今も続いているのである。この風習は山添村でも良く残っており、家の入口にユズリハに御飯をの



▲フクマル(室生村深野)

せて供え、その脇で藁をもやして、その火を家の中に持って帰り、イロリの火とするのである。

これらの風習を見ていると、外から正月の神がやってくると信じられていたのであろう。大和の俚謡の中に

正月さんどこまで  
あの山のどこまで

と言うのは、正月の神さんは外からやってくると信じていた表れであろう。

さて、大晦日から元旦にかけ私達はどのように正月を祝ったのであろうか。少なくとも今日のように神社仏閣に多人数が初詣をするという風習は、以前はあまり見られない。初詣はせいぜい氏神さん程度であったであろう。

かつて、神社仏閣に参るとすれば火をもらいにゆく場合が多かった。これはフクマル迎えの火もそうであるが、神聖な火を雑煮を炊く種火とするためである。雑煮を炊くためには、普段の火と異にして、神聖な火を必要としたのである。

雑煮は神聖な火で炊かれると同時に、神聖な水も必要であった。水はワカミズと呼ばれ井戸や川などに元旦になった早朝まだ暗い時

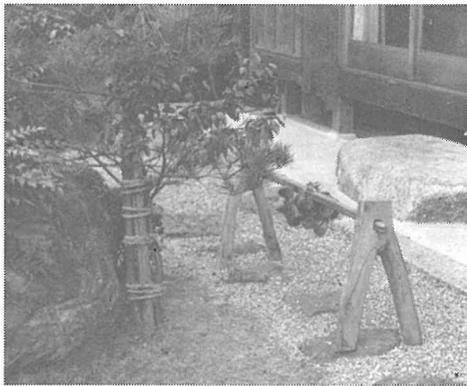
にくみにいった。これら神聖な火や水は、みな男(家の主人)が準備したものである。これらのことから、雑煮はあきらかに普段とは違う特別な儀礼用の食事とすることがいえる。先に、正月にはどこからか神がやってくると信じられていたようだと記したが、雑煮はこの神にささげる供物であり、神人共食の料理であった。

雑煮を炊くのも男であった。雑煮は大根・里芋(コイモ)・豆腐・昆布などを入れ、味噌によって炊かれたものである。この雑煮に餅を入れて食べるのである。雑煮はところによって色々なものを入れる。山添村では里芋のかわりにイモのオカシラ(ズイキイモ・トノイモ)といって大きな芋を雑煮に入れる。雑煮を炊くのは、元旦の暗いうちである。炊き終わると一同起きて、正月の祝儀として祝う食事となる。

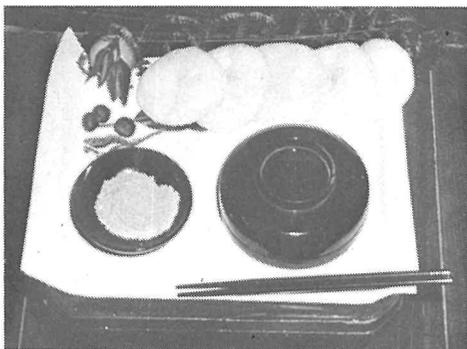
元旦の食事になる前に、イタダキの膳と称するものを、家中の者がその年の明の方向にさし出して礼をするのである。たいてい、イタダキの膳は床の間に供えられ、足の高い膳で、上に餅・吊カキ・ミカン・昆布・ヒシ・カチンボなどをのせてある。また、ウラジロをしき、その上にコージミカン・トコロ・クリ・ほし柿・ユズソバ・オシモチ5個をならべ、床の間の前でその年の明の方へ拝するようである。この時「チョヤドンメデタイ、百六ツマデ生キテンカ」と三回唱えるとも言う。このイタダキの膳がすんでから、雑煮を食べる。雑煮のおかずは、数の子・田作り(ゴマメ)・黒大豆・酢ゴボウ(ハリハリ)・棒ダラなどが重箱や瀬戸物の重ね鉢に詰められて食せられた。

雑煮を食べてから、家の者はまた寝るのであるが、これをイネツム「稲を積む」と言われたのである。かつての正月は戸を閉めきり家の中を暗くして、ひっそりとすごしていた。村中、この正月元旦には静かであったのである。これは三ヶ日の場合が多いが、松の内は『高取領風習問状答』の中には「奈良・郡山・高取は七日」「小泉・芝村は四日」「柳本は六日」と記されている。

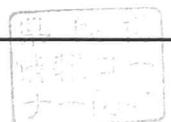
このように正月行事をみてゆくと、かつては、正月の神を家の中に迎え入れ、その神といっしょに松の内のあいだひっそりとすごしていたのである。そしてこの正月の神に供えるのが雑煮であって、家族は正月の神といっしょに饗宴していたのではなからうか。



▲カドマツ(室生村深野)



▲イタダキの膳(山添村勝原)



## 副業としてのフゴ作りについて

徳田 陽子

稲藁を使用した藁細工は、少し前までは多種多様にあり、日々の暮らしの中で至る所に見ることができた。その中で、農作業用のミノ・苧・フゴ等の地域的差異を中心に調査していく過程で、自家用だけでなく、副業としての藁細工が、かつては奈良盆地ではかなり盛んであったことがわかった。そこで今回は、副業としての藁細工の中から、特にフゴに焦点を当てて、調査の中間報告をしたいと思う。

しかし、一口にフゴといっても使用目的により、大きさ・形・作り方等が異なる。作り方は大別すると、苧状に織る場合（ただし、片織りといって、苧のように織機の両端から藁を入れるのではなく、藁の切り株側を一方にそろえて片側からのみ藁を入れて織る方法）と、俵編機を使って編む場合があり、作り方から使用目的をみると前者は穀類・野菜・果物等を、後者は野菜・果物・道具・弁当等を入れることが多かった。

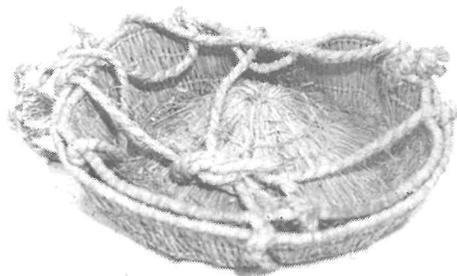
では、副業にフゴ作りをした事例として、まず、「ダイゴフゴ」と呼ばれていた橿原市醍醐町のフゴをみていくことにする。ここでは昭和30年代前半まで、米4斗入り（直径約80cm高さ約40cm）のフゴ作りをしていた。

作り方は、フゴ機で、藁を約50把使って厚く苧状に片織りした。経糸にする縄には、開口部は太縄2本・中央部は細縄12本・底部は五分縄8本で、合わせて藁を約30把使った。苧状になったものを外で干してから、苧の両端を合わせて、残しておいた経糸でとじ、底部の耳（藁のスエの部分）をまとめてくくって仕上げた。1日に1荷（2個）ぐらい作った。

昭和10年頃の1日の手間賃は、縄ナイで80銭から1円、フゴ1荷で1円から1円50銭であった。縄ナイ機を使用するようになったのは大正末から昭和初期にかけてである。縄ナイは冬の農閑期にした。フゴ用の苧織りは8・9月にし、10月にフゴに仕上げたという。苧織りだけなら1日に2人がかりで9枚ぐらい織ることができたという。出来上がったフゴは

各家により、明日香村祝戸や御所・高田・吉野方面の荒物屋へ売りに行ったり、桜井市江包等にフリ売りに持っていく目的で購入に来た別の村の人に売ったり、自家用にするために買いに来た人に売ったりしたという。フゴ問屋はなかったが、昭和10年頃、一時、フゴ組合を結成し、ダイゴフゴと製品に擦り込んだことがあるとのことであった。このほか、米1石5斗入りの大フゴを、大正中頃から昭和10年頃まで、注文に応じて作った。これはこの時期に植えたアサヒホという晩生の品種の稲穂が特別に長いので作れたのだという。しかし、穂が長いと強風等に弱いので、次第に穂の短い品種に改良されていった。

次に、広陵町沢の例をあげよう。ここでは戦後、副業としてのフゴ作りが盛んになり、昭和32～3年頃まで続いた。フゴの大きさは直径約60cm、高さ約40cmである。作り方は、長さ150cm、幅40cm程の苧を、藁を約15把使って薄く片織りし、残した経糸で苧の両端をとじ、底をくくった。紐は注文に応じてつけた。材料の藁は梗藁を使った。糯藁は粘り気があるので家庭用の縄やシメナワ作りに使ったという。藁は、秋に田でスズキにして干しておいた。スズキは、カコ（稲穂を干すときの檜の足場木）を芯にして、その周囲に藁のシビをおいた上に藁束を重ねて作った。そのまま藁は年を越してから、「寒上げ」といって、寒の内に家に持って帰り、ツシの2階に保存した。沢にはフゴ問屋があり、沢は勿論のこと



▲フゴ（編む）

同じ北葛城郡上牧町新村・河合町佐味田、磯城郡三宅町伴堂・川西町唐院等から蕙状になったものを買取り、問屋の近くの農家に頼んでフゴの形に仕上げたという。

問屋では、農家で冬の農閑期にまとめて作ってもらい、トタン葺きの倉庫に保存しておいた。こうして集めたフゴは、和歌山や泉州等へみかん・玉ネギの運搬用に出荷した。河内へもジャガイモ・サツマイモの入れものとして売ったということである。

沢の場合、戦前は薄蕙（紡績工場の梱包用蕙）を織っていた。沢の大字内に、沢の蕙をまとめて買ってくれる問屋があった（戦後のフゴ問屋とは別である）。夕方になると、その問屋で1荷（蕙20枚）を1円から1円50銭の現金と交換してもらった。しかし、この問屋は沢の蕙だけを取り扱う小規模なものであり河合町佐味田で大規模に蕙問屋をしていた上村家の方が高値で買ってくれる場合は、佐味田まで持って行く人もあったという。それが戦後、紡績工場が不景気になり、又、ダンボール箱が普及し始めた頃から、同じ蕙織機を使って作れるフゴにかわったのである。

以上、副業としてのフゴ作りに共通していることは、蕙織機、あるいはフゴ機（註1）を使ってフゴを織ったということと、昭和30年代前半に需要が激減し、衰微していったということである。つまり、副業としてのフゴは、編みフゴではなく織りフゴが多かったということがいえる。特に、ダイゴフゴの場合は、蕙を多く使って厚く織ったので手間がかかり、自家製よりも購入の方が場合によっては安くつくということがあり、かなり前から、副業としてのフゴ作りが盛んであったことがうか



▲ダイゴフゴ（織る）

がわれる。

それに対して、沢の場合は、明治以降、紡績工場が各地にできて紡績蕙の需要がふえたときには蕙を織り、それが衰えると同じ織機を使って作ることのできるフゴにかわったことをみてもわかるように、時代の要求に応じた蕙細工を副業にしたのである。このような時代的变化の背景には、大正末頃、蕙織機が2人用から1人用になり、縄ナイ機も普及し始め大量生産ができるようになったことや、製品が問屋を通して商業ペースにのり、関連した産業の景気が直接に影響するようになったこと等があげられる。

又、織りフゴと蕙は同じ蕙織機で織る場合が多く、関係が深い。河合町佐味田のように紡績蕙や運搬用フゴを織ると共に、モミ干し用の厚蕙を織って、各自で売りに行った所もある。このことから、かつての副業が厚蕙やモミ入れ用フゴ作りであった所が、時代の要求により、場所によっては紡績蕙や運搬用フゴ作りに変化したことが推測できる。このような地域の変化を、近世の古文書等で明確にしていきたい。

このほか、県下でフゴを購入した事例を調べていくと、地域によっては県外からフゴを購入した所がある。例えば、桜井市（註1）等には伊賀フゴを売りに来し、三重県との県境の添上郡月ヶ瀬村桃香野ではモミ入れ用のフゴは三重県上野市の荒物屋で買ったという。フゴの取引圏に関してだけみても、作る人と買う人の間に行商人や荒物屋、場合によってはさらに問屋が仲介して取引範囲が広がったことがわかったので、さらに、フゴの取引圏の分布についてくわしく調査していきたい。

今後は、時代的な地域の違いや取引圏等をふまえて、自家用、副業用を問わずフゴ類全般について続けて聞き調査を進めていき自家用から産業用にも至るフゴの多様な利用方法を、蕙の活用のしかたの地域的特色の一つとして把握していきたいと思う。

末筆ながら、調査に御協力下さった方々に御礼申し上げます。

（註1）『桜井市史』下巻（昭和54年刊）による。

## マエビキとその職人

横山 浩子

マエビキとは、製材及び挽き割り用の一人挽き大型（標準的なものは歯渡り1尺8寸、巾1尺2寸～1尺5寸程度の大きさ）の縦挽鋸である。木挽きが使用する鋸、ということでコビキノコと呼んでいることもある。

江戸時代初めの頃の木工書『愚子見記』に「木挽起之事」として

大鋸ハ一ノ鋸ヲ二人挽也。最モ杓ハ斧ヲ遣フ者也。小木ハ木工童ニ鑿引カセ用ユ。然ルニ大仏殿成ルコロ世ニ前挽ト云フ物出来テ、大仏殿棟梁ハ木引十人 或ハ三十人宛抱へ之ヲ勤ム。

ということが見え、これによれば方広寺大仏殿建立（着工は天正14年）の頃マエビキが現われたとしている。

そしてこのマエビキは、この時期には、同じ大型縦挽鋸として既存していたオガ（大鋸）をやがてしのいで、それに取って替わったのである（縦挽鋸の歴史的なことに関しては、ここにくわしく述べることはできないが、例えば平澤一雄『鋸』などに考証されているので参照されたい）。

機械製材が我が国に輸入され、民間に導入されるようになったのは明治時代前半のことであるが、それにしたがってマエビキが漸時その必要性を失なった時、それにたずさわった多くの職人達もそのすぐれた知恵と技とともに私達の前から姿を消していった。

今回は父子二代前挽屋であったという望月恵太郎氏の話を中心にその職人について考え

てみたい。

\*

\*

望月氏の父は、当時マエビキの産地の一つであった滋賀県甲賀郡の南杣村でマエビキの透き屋職人をしていたが日露戦争後現在住んでいる奈良市中清水で前挽屋を始めた（明治37年）。

前挽屋の第一の仕事は、マエビキの販売である。このマエビキは専門の鍛冶屋により、特定の産地で作られる。このあたりでは播州も有名であったが、望月氏のところでは、その出身の縁もあって扱ったものは全て江州鋸であった。このマエビキは仕入れたものをそのまま売るのではない。生産地では、鋸の格好に作り、歯を打ち抜いてコミネを打ち（ウチ屋の仕事）、スキガンナで厚みを整えた（スキ屋の仕事）状態まで作る。

前挽屋ではこのアラス（新子＝新しい鋸）と呼ばれるものを木挽に売るが、マエビキは歯だけに焼きを入れるという特別な焼きの入れ方をするので（これを歯焼きというが、その方法は吉川金次氏の『鋸』に詳しいので参照されたい）、木挽はその場であさりをつけて再び前挽屋に渡し、この歯焼きをしてもらう。ちなみに、マエビキの歯は消耗が激しく、木挽は1ヶ月～2ヶ月に一度は歯焼きを訪れたという。あさりのつけ方や目のすり方は挽く材の質や自らのくせに合わせてその都度微妙な調節が必要で、その難易は歯焼きの加減にかかっている。



▲当館所蔵のマエビキ



▲マエビキの歯焼

また前挽屋は鋸の微調整、修理をする。

いくらよい産地のマエビキでもその仕上りはそれぞれ微妙に違い、木挽の方にも個々にくせがあって、買った鋸そのままではただちに使えない場合も多い。そこで注文に応じて鋸身をさらにすいて厚みの加減をしたり、ツチでたたいてだぶらす（鋸に腰を入れて、妙なよじれが起らぬよう調節する）ということをした。

歯継ぎとって、折れた歯を継ぐ修理方法はまず折れた部分と継ぐ部分を互いに斜めにそいだ様な形に叩き延ばし、礮砂と鏝の粉を混ぜたものを間に挟んで竹へらを重ね、その上からハシという道具を暖めたもので挟んで礮砂を糊状に融かす。そしてへらはずして和紙を湿らせ炭の粉を撒いたもので歯を巻きその上からヤキバシで挟み、その上からさらに2本のヤキバシを使って圧力をかけて（この時2人掛かり）頃合いをみて、素早く全てをはずして鉄床かなとこの上で叩く、という手順である（和紙を用いるのは、そのまま行なうと継いだ歯がヤキバシにくっついてしまうからである）。

その他望月氏の店では鋸の交換、貸し出しも行なった。

店で自分の手に合ったアラスを見つけた木挽の中には、自分の手元でいらなくなった鋸数本を代わりに置いてゆく者もいた。また、そうした中古品の鋸はさらにそれを気に入った者が自分の鋸と交換してゆく、ということがしばしばあった。

貸し鋸は巨木の大割りに用いる「芯切り」と呼ばれる特殊な大型鋸の貸し出しである。

木挽の仕事は、「木挽の一升飯」という言葉が残る程の重労働であり、また長い材を狂いなく真直ぐ挽かねばその値打ちを損なってしまうのであるから、いかに良い道具＝仕事の必要に応じた調節がよくなされ、使用者の手によく馴染む道具を手に入れるかは、切実な問題であった。前挽屋は、木挽達のこのような要望に答え得る道具を整えるマエビキ専門の店であった。奈良県内には望月氏を含めて昭和初めまでに五軒あったという。この中には吉野地域が含まれていなかったが、村の鍛冶屋がそれに代わって歯焼き等を行なってい

たか、大阪や三重方面の前挽屋をたのんでいたのかと思う。

\*

\*

最後に木挽職人についての聴取を紹介しておく。

望月氏の店では、主に市内から生駒、平群桜井あたりで働く木挽が多かったという。

彼らは、仕事のない時は農業に従事している者、または渡り職人が大半で、個々独立的に活動していた者が多かった。

そしてその仕事はそのままでは搬出できない巨木の大割りや筏組みを行なう、といった内容のものが多く、それは大抵5～6人から10人未満の寄せ集めの集団による小規模な仕事だったようである。

農業兼業の木挽ではその仕事の比重は、腕前によってさまざまであるが、その活動範囲は、せいぜい近畿圏内であった。

一方、専業の渡り職人はかなりの広範囲を渡って歩いたらしく、望月氏の所にも関東や九州等さまざまな地方出身の者が訪れたといい、また県内東山中には5～6人の組になって木挽がいて、前述の貸し道具の鋸を持ち北は北海道から南は屋久島まで行ったということである。このような人々の仕事の斡旋を行なう前挽屋もあったらしい。

木挽の中で比較的長く命脈を保ったのは以上のような形態で働いていた人々であり、機械化のあまり進まない小規模なところでの仕事であったからである。それで彼らの姿はつい最近まで見かけることができたのであろう。

このような労働形態の木挽職人の姿はおそらく古くからも見られたのであろうが、江戸時代の記録にあるような、或いは機械導入以前の木挽による大規模な製材所（例えば大阪の寄せ挽のような）のあった頃とは、組織その他にも変遷があったのではないかと思う。木挽職人のことについては今後さらにくわしく考えてみたいと思っている。



# 行者講 一桜井市慈恩寺の行者講一

浦西 勉

奈良県下において、山上ケ岳に詣でる行者講あるいは山上講は、今日だいぶんすたれているようであるが、かつては各村々に存在していたと考えても良い程、多数あったようである。しかも、奈良市餅飯殿町のように、同講の所有する「大峰山上秘密」の奥書には「大和国南都添上郡内餅飯殿郷山上講中(中略)慶長十一(1606)年丙午卯月廿九日」とあるところから、近世初頭にすでに山上講の存在を知りえる。しかし、行者講の具体的な活動について、未だ多く紹介されていないようであり、その理由として、行者講の実態調査や資料調査が広く行われていないところに由来する。今後、多くの行者講の資料の調査や保存につとめたいものである。

さて、当館において桜井市慈恩寺から行者講、または森山講と呼ばれる講から、この講に伝わる資料一式の寄贈を受けている。その一式とは大きく分類して次のようなものである。

1. 本尊 役行者像(厨子入り)
2. 祭具 火鉢(護摩用)、錫杖、木魚、鑿子、法螺貝、数珠、鈴、三方、香炉、御幣、花立て、瓶子、杯、蠅燭立て
3. 経本 行者勤行次第 他表題無し2冊
4. 古記録 森山講歳祭宿勤帳、森山講月勤帳、大峰七十五驛、行者問答、表白文
5. 衣装 行者導師衣装
6. その他 幕、箆子、ボダイソンの、椅子

以上のごとく、大変よく資料がまとまっている。

古記録の最終年号は昭和39年であり、この年まで月勤め(2ヶ月に1度)と歳祭り(年2回)行事があった。

次に伝承の聞書を記すことにする。<sup>註①</sup>この講は村内21軒(昔は32軒)で営まれていた。講の財産が1反1畝の土地があり、この年貢で年2回の歳祭りを営んだ。年2回というのは4月7日(昭和17年まで旧3月7日)と12月7日(同じく旧11月7日)の日である。当日、当番のヤドに講員が集り、護摩を焚き、表白文や経典は導師が読み、講員は法螺貝、錫杖、鈴などならし、特に経の中の山オロシの時はにぎやかになる。行事が終ると小豆餅を食べるのである。歳祭り以外、年6回の月勤め(1月・3月・5月・7月・9月・11月の7日)がありこの時、色飯を食した。また年1回夏には子供をつれて山上ケ岳に登った。以上が簡単な間取りの報告である。この講が、いつ成立したのか不明であるが、行者像の底面に「天保七年甲五月吉日、大坂北久太郎、心才橋道五丁目 大佛師荒井左文」の銘があるところからこのころすでに講が存在していたことがわかる。

註① 西崎友通氏・酒井秀雄氏・谷川嘉春氏の御教示による。



▲役行者像

## ★★★★ おしらせ ★★★★★

### ●民俗博物館の行事予定

☆58 11月23日～59 3月28日

テーマ展「暦と時」

☆59 1月21日(土)～22日(日) 体験学習講座

〈特集・はたお教室〉

※体験学習講座ご参加ご希望の方は、講座内容、時間、受付日等々についての詳細については当館へお問い合わせ下さい。

☆59 2月19日～3月18日の期間に民俗カルチャー講座〈民家コース〉を開講します。

### ●民家コース〈街道と城下町のすまい〉

- 59% 寺内町の民家 奈文研 松本修自氏
- 3% 街道筋の民家 奈文研 上野邦一氏
- 3% 城下町の民家 奈文研 亀井伸雄氏

※上記の講座は募集制になりますので、ご希望の方(全回出席可能な方)は当館へ往復ハガキ(コース名、住所、氏名、年令、電話番号を記入)でお申し込み下さい。

《表紙解説》毎年11月7日と1月7日に山の神まつりを行なう上北山村西原では、山の神さんに供物とともに寶物を供える。イカダ師はイカダのミニチュアを、ハツリ師は、ハツリヨキではつつた角材のミニチュアを、そして炭焼きは炭を水引きで結んで供える。かつては、当屋の家から繩にすべての寶物を結んで山の神の祠まで練り歩いて持っていったというところである。

### ■編集後記■

11月に入ると雨の日が多くなり、雨が降るごとに少しずつ寒さが増した。11月中頃の寒風は、人に寒気団のまえばれをつげた。空の色も雲も冬化粧へ仕度しはじめた11月も終り、いよいよ冬本番へと向っていく師走も、半月もすると冬將軍に見守られてやってくる。今はもう、冬到来の季節となった。

民俗公園の樹木も衣替えを始め、気の早いものはもう紅葉しきっている。

一方、民俗博物館も、11月下旬に衣替えを行ない新しい展示になったが、展示替えの中味でキワダツのが借り物であることに気付く。「何故なのか」と自問するとき、館蔵品の民俗文化財と呼ばれるものと展示との距離を感じないわけにはいかない。

しかし、この距離をなくすために、資料の調査研究によって、民俗文化財として甦えることに、おしまない努力もしつつある。

ただ、この過程で、社会的に困難な壁につきあたることも多々あるのだが、民俗文化財と展示との距離間を、調査研究によって縮める必要がある。一般にいう「文化財」という観念とのかかわりの中で……。

(一〇)